

# *The Lord of the Rings* の一考察

中 尾 セツ子

## *The Lord of the Rings, a Catholic Fantasy*

Setsuko Nakao, A.C.I.

This is a tentative study of Tolkien's *The Lord of the Rings* in comparison with *Sir Gawain and the Green Knight*, in particular of the heroes' missions. Both heroes, Frodo and Gawain, take a toilsome journey to accomplish their mission, and are wounded on the last stage of their tasks. A further study of the journey reveals that LOTR is a Catholic fantasy although this is never manifest verbally, and Naomi Lewis says that one can read through the book without noticing that the author is a Catholic. The unexpected call of Frodo to destroy the Ring, his incurable wounds, the role of the wicked creature Gollum in the hero's task, and many other events in the story can be classified as 'the inversion of the norma'. This stems from the Christian view of life, and from this point alone can be explained the mystery of Frodo's vocation. While SGKG was written against a background of a strong Christian ethic in society, LOTR is a product of an increasingly non-Christian society and this explains the essential differences between these two works of apparent resemblances.

今日でこそ J.R.R Tolkien の代表作として *The Lord of the Rings*<sup>(注1)</sup> (以下、LOTR とする) は知られているが、1954年に初版が出たときには出版社は勿論のこと、Tolkien 自身も読者の反応について決して楽観的ではなかった。しかし1960年代に入ってからいわゆる 'Campus classic' なるものがアメリカの諸大学を中心に大きなうねりとなってこの作品に人々が注目するようになり、以後、1990年までの間に1500万部が売り尽くされ、学界においても種々の方面から研究が試みられている。今日これはもはや流行ではなく、この作品が文学作品として価値あることが証明されてきていると言えよう。とはいえ他方には LOTR に対して厳しい批評家も少なくない。すでに1981年に Jessica Yates は、'The Tolkien phenomenon while making many enemies among literary critics still awaits objective analysis'<sup>(注2)</sup> と書いている。

LOTR は、J. R. R. Tolkien がイギリスには固有の神話が無いことを嘆き、「イギリス神話」と呼ばれる作品がほしいと考えて書いたものである。したがって、それによれば神話に分類されるはずだが、出来上がった内容から見るとこれは epic と呼ばれてよい作品である。それはホビット族の一人 Frodo Baggins が使命を果たすための探索と冒険の旅を語る長い物語である。本書を読みながら一度ならず脳裏に浮かんだのは、学者 Tolkien

の専門分野に属するイギリスの古い時代の作品である。一つは、アングロ・サクソン時代の叙事詩、*Beowulf* であり、他は14世紀の *Sir Gawain and the Green Knight* (以下 SGGK とする)<sup>(注3)</sup> である。

Tolkien は著名な *Beowulf* 研究者であり、彼の“*Beowulf: The Monsters and Critics*”はその後の *Beowulf* 研究の方向を変えたと言われている。<sup>(注4)</sup> また1976年オックスフォード大学出版の *Beowulf* 翻訳も他に追随を見ないという定評を得ている。<sup>(注5)</sup> これに先立つこと50年の1925年に Tolkien はすでに、E.V.Gordon と共に優れた SGGK 注釈を編集している。したがって彼は SGGK に関しても権威者である。そのような学者が創作の過程において、自分の研究を意識的にはもちろんのこと、無意識のうちにもそれが活用されていくのは当然であろう。これは Tolkien の LOTR に先立つ作品においても同様であるが、LOTR を読むにつれ、英文学の中では特に、*Beowulf* と SGGK がしばしば想起された。Jane Chance や Roger Sale も両者の類似性にふれて論じている。<sup>(注6)</sup>

そのような理由により、ここでは LOTR を研究するうえで SGGK を参考としてとり上げてみることにする。SGGK は中世のロマンス詩であり、他方、LOTR は20世紀の長編ファンタジーである。これを探求の物語とか叙事詩として見るとき、両作品には種々の共通点が見えてくる。中心的人物、つまり SGGK の Gawain と LOTR の Frodo は二人とも使命を帯びて旅に出る。それは長さこそ違え、いずれも障害を克服しながらの苦渋に満ちた旅である。目的地に着いたとき二人とも自らの弱さのゆえに傷手を負うが、ついに目的を果たしてそれぞれが故郷に帰る。その英雄的な使命遂行によって Gawain は自身のみならず Round Table の騎士たちの名誉も守った。Frodo は Ring を破壊することによって Rings の製作者 Sauron に起因するすべての悪から Middle Earth を守り、救った。使命を帯びて旅する主人公の冒険と使命の遂行がもたらす救い、これが SGGK と LOTR に共通する主な事項であろう。

本稿では特に LOTR における旅に焦点を当て、Tolkien が SGGK の伝統を意識しながらもそれとどのように異なる物語を書き上げているか、また、その違いの根拠がどこにあったのかを考察し、論じようとするものである。

## I 探索の旅

まず、旅の動機、目的、状況、使命の達成について、Tolkien は SGGK から種々の示唆を受けている。しかし二人の主人公、Gawain と Frodo との最大の違いは目的であろう。Gawain はどれほど不条理であれ、とにかく Green Knight の挑戦に応じた約束という騎士道精神の根本にある loyalty (忠誠) に基づき、名誉のため旅に出る。それは最後には死が待ち受けているはずのものであった。約束を守るとは Green Chapel で Green

Knight に首を切られること、つまり死を甘受することを意味していたのである。目的地に近づくとは死に近づくことを意味した。Gawain は名誉のためには命よりも死を選ぶべき騎士道精神を体現するはずの理想的な主人公として描かれている。

Frodo の場合は、旅の到着点は必ずしも死ではない。しかし目的地は Mordor, ラテン語の mors (死) を連想させる 'black land' で、Frodo と Sam が見た Mount Doom (滅びの山) はまさに地獄の深淵そのものである。

.....all at once there came a flash of red that leaped upward, and smote the high black roof... But a great fissure, out of which the red glare came, now leaping up, now dying down into darkness; and all the while far below there was a rumour and a trouble as of great engines throbbing and labouring.

*(The Return of the King p.196)*

Frodo の目的はそこに Ring を投げ入れて破壊することであった。それ自体は死を意味しないが、そこに至るまでの旅が余りにも過酷であったので、旅自体が死の行進であったと言えよう。幾たび Frodo は死に近いものを体験し、幾たび奇跡的に助けられたかわからない。しかし、死の行進の末についに Ring を Mount Doom に投げ入れるべき時になってから Frodo の精神は瞬間たじろぎ、Gollum の暴力によって奇しくも使命を果たしたのであった。

SGGK の Gawain の動機は何であったか。Camelot の Round Table に突如として現われ、Arthur 王に挑戦した Green Knight の不合理な要求に対して、Gawain は王と Round Table の名誉にかけて挑戦に応じた。それは今 Green Knight の首を切り落とし、一年後のこの日、つまり新年の日に Green Chapel に行つて今度は Gawain 自身が Green Knight から返礼の一撃をその首に受けるということである。この挑戦に応じるとは死を覚悟するにひとしい、ゆえに誰一人挑戦に応じようとしなない、という恥ずべき状景がここに描かれている。Gawain はこの屈辱から仲間を救うために自らを捧げる決意をした。これは中世の騎士道精神ではむしろ名誉であり、Gawain は自分の名声が上がることに満足している。<sup>(注7)</sup>初め Gawain は Round Table の騎士の名誉を守るために Green Knight の挑戦に応じるが、Green Chapel に赴くことはしだいに彼の個人的な名誉追求のためになっていく。

他方、LOTR の Frodo は物語の主人公であったとしても、自分がそれほどの使命を課されるとは夢にも思っていなかった。Ring を Mordor の深淵に投げ込むという最終的な使命は初め Gandalf からは示されなかった。Frodo は Ring を渡され、Ring の不思議な由来を聞いたとき、Ring を所有する事をひどく恐れたが、Gandalf の話を聞いている

うちに ‘I must keep the Ring and guard it’ (*The Fellowship of the Ring*, p.67) と考える。更にこのまま Ring がここにあつては Bag End と呼ばれるこの村自体も危険にさらされると聞くと、彼は村と自分の家をこの上なく愛しているにもかかわらず、長い熟考のあとに ‘I ought to leave the Bag End’, と Gandalf に答える。理由はこの村を危険から救うために他ならない。

しかしここで Frodo は最終的に Ring をどうすれば良いのかまだわかっていない。Gandalf の勧めにより、まずは村を出て Rivendell に行くべきであった。第一部 *Fellowship of the Ring, Book 1* の終わりまでかかった危険な旅の中で、Frodo は Black Riders に襲われ、瀕死の状態に Rivendell に運び込まれる。そこでは彼の快復を待つ重要な会議が開かれた。Ring を Mordor の深淵に投げ捨てて破壊するにはどうすればよいかということである。その討議をすべて聞いていた Frodo は自分がその使命を遂行しなければならないことが次第に分かってくる。そしてついに自らそれを引き受ける決意を表明した。 ‘I will take the Ring’ (*The Fellowship of the Ring*, p.259)。こうして Frodo の場合、使命の最終的受諾に至るまでには相当の日月がかかり、幾多の過程を経ていったのである。

主人公たちが旅を決意してから出発までに Gawain の場合には約1年、Frodo の場合にはさらに数年もたっている。Gawain の場合、使命を受諾する決断は初めからなされていた。約束を守るなら一年後に Green Chapel で首を切られるという旅であるが、ここでは Green Chapel という怪しい場所が恐怖にも似た不安をかもし出している。Frodo の場合は直接死に向う旅ではないが、Ring を破壊するために探索して行くべき Mordor の Crack of Doom とは聞くも恐ろしい所であり、誰もがその語を口にすることさえはばかっている。そこへ辿り着くまでの不安も加わって、Frodo にとって自分の決意は死を選ぶに等しく思えた。Gawain も Frodo も先が見えないという点で共通するが、二人とも最終的には自分でその使命を受諾している。Gawain は進んで使命をわがものものとしたが、Frodo は討議し、熟考の末に受諾したいという状況である。

使命を帯びて探索に出発する二人の状況は対照的である。Gawain の場合には一年先という出発の時期が Green Knight によって明確に決められていた。彼の決意さえあれば実行に移されることで、名誉心の満足があったから、彼は勇んで出発した。一同は彼に同情し、別れをひどく惜しんだ。しかしこのように惜しまれて出発する事は Gawain にとって非常な名誉であった。Gawain の立派な武装姿は命を断たれるためと言うよりも、むしろ勝利を目指しての晴れの門出のように見える。

Frodo に目を移すと、彼は村を去る決意をしながらもためらいの気持ちが強く、なかなか時を決め兼ねていた。進んで出発の時を目指して、恐れる事もなく待っていた積極的な Gawain とは対照的である。出立を決意して後にも Frodo は具体的な事について Gandalf

の指示を仰ぎたいと、逡巡しているかに見える。しかし Gandalf からの指示も途絶え、ついにこれ以上延期できなくなり、出発せざるを得ない状態になってしまった。Frodo の旅はまずこのようにして始まる。出発は極秘のうちに準備され、闇にまぎれてひそやかであった。村の者たちに知られたくなかった。それは詮索好きな彼らの好奇心をそそりたくなかったからである。それで Frodo は単に村から3日ど歩いて着く Crickhollow に引越した、と思われるように時間をかけて予め準備をしていた。これを見ると、Frodo はただ消極的だったのではなく、決意すると、旅を計画どおりに始められるよう、無用な妨害が入らぬようにと、懸命に考えて準備していたことがわかる。

Gawain の出発は賑やかであったが、旅は孤独であった。Round Table の騎士たちは Gawain に同情こそすれ誰ひとり旅の苦難を共にしようとする者はいない。これは SGGK に見られる円卓の騎士たちに対する作者の批判でもある。Gawain は愛馬 Gringoleet のみ探索の旅の道ずれとして旅立つ。こうして彼の探索は孤独との戦いの道のりであった。

Frodo は一応使命を理解して引き受ける事を決心したとき、一人で行く覚悟があったがやがて共鳴者が集まり、出発時その数は数人になっていた。しかしそれは旅の過程で次々と散らされ、最後まで Frodo に同伴できたのは Sam 一人だけであった。この点は Gawain の場合とかなり違う。その Frodo と Sam は実に過酷な孤独感に押しつぶされながら苦しい歩みを進めていった。非常に険しい道のりを喘ぎながら一步一步進まねばならなかったからである。肉体的には極度の限界に、更に精神的には Ring の重圧が増すばかりであった。Gawain も旅の苦難を味わっているが、Frodo の旅の苦しさはそれとは比較にならないほど熾烈であった。しかし Frodo には Gawain には無い支えがあった。それは忠実なしもべ Sam という伴侶である。

## II 負傷

SGGK と LOTR において主人公はいずれも使命を果たすときに傷を負う。この傷にはそれぞれの作者が独自の意味を与えている。Gawain は Green Knight からの一打で首が落されるはずだったが、不思議に3度目にやっと傷になるが、それにもかすり傷で済んだ。その理由は Green Knight がやがて説明するように Gawain が3日目の獲物の交換に際して、完全には誠実でなかったからであると言う。‘At þe þrid þou faylet þore/ And þerfor þat tappe ta þe.’ (SGGK 2356-57行)

Gawain ロマンズのタイプに描かれるような理想的な騎士ではなく、Pentangle Shield (五角の盾) が表す5つの徳を理想とする騎士でありながら、命惜しいばかりに誠実さやや欠けるといふ、きわめて人間的な姿がここにある。本来ならば彼は傷を負うどころ

か、首を落とされるはずであった。それを知りながら敢えて、困難な旅を経て約束通りに新年のその日 Green Chapel に着き、死を覚悟して首を出したのである。この時、彼は奥方からもらった帯を身に着けていたから<sup>(注8)</sup>死を免れると安心していただけの良ののだろうか。それはこの作品の趣旨から言って考慮に入れないことであり、あくまでも Gawain は死への恐怖におののきながらもひざまずいたのである。彼の心境に注目するなら、彼はたしかに帯を締めてはいたが、Green Knight の前に膝をついたときには、心理的に帯の魔力などに期待する余裕などなかったに違いない。Gawain は使命を果たしたとはいえ、そこには命への執着心に負けて、獲物の交換という約束を守らずに、奥方からもらった魔法の帯を隠し持っていたという屈辱的な自己防衛の行為もあったことは事実である。

Gawain が Camelot に生還したとき、皆はこぞって大歓迎だった。それは死んだはずの者が無事に帰還したからであり、Gawain の屈辱の帯の体験も彼らには手柄話としか聞こえなかったほどである。Gawain の首の傷は帰還の旅の間に癒えたが、この傷を負ったことは弱さの自覚を促して余りあり、Gawain はこれを厳しい戒めとして、以後つねに緑の帯を身に着けていた、と物語は結ばれている。

Frodo の傷はどうであろうか。Frodo は最後の瞬間に敵の脅迫に屈して指輪をはめたためにその指輪の魔力に圧されて我を忘れ、‘I do not choose now to do what I came to do. I will not do this deed. The Ring is mine!’ (*The Return of the King* p.196) などと叫んでしまった。長い過酷な旅の末ついに Mordor の深淵に立った時の彼の叫びは、これまでの彼の辛苦をすべて水泡に帰してしまうほどの驚くべき背信の宣言であった。自分の弱さを極限まで感じた Frodo はもはやまともに判断できないほど衰弱していた。しかしこの危機一髪の瞬間に Frodo を救ったのは実は、あれほど憎むべき存在でしかなかった Gollum だったのである。ここに作者の強い主張が響く。Jane Chance が ‘inversion of the norm’ (基準の逆転) と呼ぶものである。<sup>(注9)</sup> Gollum は Ring 欲しさの余り Ring をつけた Frodo の中指を噛み切ったが、狂喜の余り足を滑らして Ring を手にしたまま Crack of Doom の深淵に転落してしまう。これによって Frodo の使命はついに成し遂げられた。この迷いのときに Gollum の襲撃が無かったならば彼は大任を果たし得なかったと言える。このような Ring の結末に関して Frodo は果たして使命を遂行したのかについては賛否両論である。

Frodo の噛み切られた右手の中指は戻らない。傷跡は痛んだが、それは肉体的苦痛にとどまらなかった。Frodo の苦しみの深みを察したのは現場にいた Sam 以外、Gandalf そして心優しい Arwen であろう。Frodo は指を失ったが、Ring を破壊するという使命を果たした。しかしそれは忌まわしい Gollum のおかげだったのである。この事実を知っているのは Frodo と Sam のみであり、Sam はそれを他言するような男ではない。のちにも

だれ一人、関知している Gandalf さえもこれについては沈黙を守っている。使命を果たし終えたとはいえ、Frodo にとって指を一本失った理由は、自分の弱さのしるしとして、以後、常に厳しい戒めとなった。

Frodo のこの傷は Mount Doom での最後の瞬間に Gollum に Ring をはめた指を噛みとられた傷であったが、実はそれより先に Frodo が受けた傷があった。これはある意味でも象徴的である。*The Fellowship of the Ring*、第11章の Weather Top で Black Rider の一人が剣で刺した肩の傷である。襲われた Frodo は勇気を振り絞って Black Rider と対決し、激しい一撃を敵に与えたが、彼自身もその時に肩をひどく刺される。これは Aragorn がやっと見つけてきた薬草 ‘athelas’ の力である程度は癒されたが、痛みは続き、困難な旅路において Frodo は苦しみ続ける。しかし指の傷が Frodo の弱点のしるしであるとするれば、肩の傷は彼の勇気のしるしである。二つの傷の意味は根本的に異なっている。後者は Frodo の勇気を証明したものである。Aragorn もこの事件の後で Frodo について Sam に ‘Your Frodo is made of sterner stuff than I had guessed,’ (*The Fellowship of the Ring*, p.194) と言って力づける。ここでは人類を救うために身代わりとなった十字架上のキリストが受けた脇腹の傷が連想される。それは敗北ではなく勝利の傷跡である。

しかし、村に帰ってすべてが鎮まったある日、それは10月6日で、2年前に Frodo が傷を負った日だったが、彼は血の気を失い、驚く Sam に ‘I am wounded....It will never really heal’ (*The Return of the King*, p.270) と苦しそうに言う。肩の傷と指の傷とはいずれも癒されないが、先に述べたように本質的に意味が違う。しかも肩の傷のほうが Frodo にとっては苦しいものになっている。Gandalf の忠告にもかかわらず Frodo が Black Rider の圧力に屈して Ring を指にはめてしまったために受けた傷は非難すべきということなのであろうか。たしかに Frodo は Mount Doom で、恐ろしい目となった Sauron の魔力に耐えかねて Ring をはめてしまった。Chance は LOTR を中世文学と比較するとき最も興味深いのは彼の ‘inversion of the norm’ であると述べている。ここには伝統的な常識あるいは英雄観とは異なる次元を持つ神話を作り上げようとした Tolkien の世界がある。したがってこれを通常の倫理、常識、理屈で分析するとき彼の世界からの主張は理解されにくい。まさに「基準の逆転」だからである。

ここで注目すべきは、Frodo の傷の意味は Gawain の場合と著しく異なっている、ということである。十字架上でキリストが受けた脇腹の傷は神学的に多層の意味を持つものであり、復活後にもこの傷は死に対する勝利と栄光のしるしとして残っている。Frodo の場合、傷は残っているがキリストの傷と根本的に違うところはそれが癒されずに残り、Frodo にとって戒めとなっている点である。‘I am wounded with knife, sting, and

tooth, and a long burden. Where shall I find rest?' (*The Return of the King*, p.236)。使命を遂行する上で負った傷という意味では Gawain のうなじの傷に近いものであるが、Gawain の傷は時が経つにつれて癒されていった。Frodo の傷はそうはならない。Gandalf は 'Alas! There are some wounds that cannot be wholly cured' (*The Return of the King*, p.236) と言うが、ここで作者は人間の原罪を示唆している。神話の神秘性をとどめながらも彼は、人間の罪深い本性の表現を Frodo の傷に託している。罪は赦され、人格は磨かれても人間の本性には悪への傾きの痛みがいつまでも残るのである。

David Harvey は 'Frodo remains cursed by his wounds'<sup>(注10)</sup> といって Frodo が使命を果たせなかったと論じているが、その後の Frodo にとって傷は戒めとなり、自己認識のシンボルとして残った。しかしこれを 'curse' とは言い難い。たしかに彼は Shire に戻って「その後は幸せに暮らしました」、という常套句で表現できるような生き方はしていない。Sam は Frodo がその業績に十分報いを受けるほどに評価されていないと心を痛めたほどであった。

Sam was pained to notice how little honour he had in his own country.

Few people knew or wanted to know about his deeds and adventures.

(*The Return of the King*, p.270)

しかし Frodo の帰郷は決してむなしい事ではなかった。たしかに彼の使命遂行の結果は華々しく語られなかった。名誉ある凱旋ではなかったし、村に完全な平和がすぐに訪れたのではない。これは伝統的な物語の結びとは異なり、Jane Chance が言う 'Inversion of the norm' の一例である。しかし、村の繁栄もやがて訪れた。Sam についていうなら、彼はやがて幸せに結婚し、1420年という年は驚くべき豊作をもたらし、村人の健康も何もかも祝された年となった。

二人の主人公の使命達成については種々の疑問の声が上がっている。上述の David Harvey のほかにも、Jane Chance は Gawain は完璧に使命を果たせたのではなく、辛うじて誘惑に打ち勝ったといえとし、これは死と破滅の雰囲気絶えず漂っているロマンスの特徴の一つでもあると述べる。また Frodo も探索に失敗し使命を果たせなかった、Ring を破壊したのは Gollum である、と記している。<sup>(注11)</sup>しかし作者の Tolkien 自身は、Frodo の行為を 'moral failure' と考える Mrs. Eileen Elgar に答えて次ぎのような手紙を送っている。

I do not think Frodo was a *moral* failure. At the last moment the pressure of



the Ring would reach its maximun – impossible, I should have said, for any one to resist, certainly after long possession, months of increasing torment, and when starved and exhausted Frodo had done what he could and spent himself completely ---- and had produced a situation in which the object of his quest could be achieved. ....his exercise of patience and mercy towards Gollum gained him Mercy: his failure was redressed.<sup>(注12)</sup>

Mount Doom における Frodo の最後の行為については作者自身が、彼はそこに至るまでに最大限の努力を惜しまなかった、立派に使命を果たしたと考えている。そして Frodo の悩みについては ‘unreasoning self-reproach’<sup>(注13)</sup> であり、むしろそれは Frodo の思い過ごしであるとかえりかかしているのである。

### Ⅲ *The Lord of the Rings* の宗教性

これまで SGGK と LOTR のいくつかの類似点を比較考察してきた。そこから次ぎのように言えよう。両作品は共にキリスト教的地盤の上に立っていると。しかし、SGGK はキリスト教が定着した中世社会の中で生まれた作品として、ことさらその特徴を際立たせる事なく、キリスト教的な価値観、倫理観を踏まえ、又読者（聴衆）もそれを知っていることを前提としている。Tolkien の場合、LOTR は ‘イギリス固有の神話’ を書こうとして始められた作品である。カトリック者として意識する作者が神話を書くのであればそれがキリスト教的要素を持つ神話になるのは当然である。作者の宗教について知らなくとも LOTR はファンタジーであると同時にキリスト教的な神話に仕上がっていったことが明らかである。

Naomi Lewis は *The Observer* 誌の ‘Myth in the Making’ で “...you can read all through LOTR without learning that its author was a devout Roman Catholic”<sup>(注14)</sup> と述べているが、この作品の根底にある価値観はカトリック的である。Tolkien 自身も John Murray 師に “The LOTR is of course a fundamentally religious and Catholic work” と書いている。しかしそれは初め無意識の内に、のちに意識的にそのようにしたとも述べている。<sup>(注15)</sup> その価値観は気をつけると至る所に現われているのであるが、それらのより詳細な考察は他に譲ることにする。

この旅は名誉・名声を勝ち得るための探索の旅ではなく、上から提案されたものを Frodo がみずから引き受けた、というものである。使命とは自分で創り出すというよりは提案されたものから自由意志をもって選ぶことである。強いられてと言うよりは、自由な選択による善行にこそ功德があるとはキリスト教の価値観である。LOTR の中で Frodo

の自由意志は常に尊重されている。Rivendell の会議においても誰一人 Frodo に強いることをしない。Gandalf は感嘆すべき忍耐を持って Frodo の決断を持つ。Ring を破壊せねばならないという状況における Frodo の姿勢に目を留めると、そこには自由の雰囲気があり、自由の中で決断が可能になる。何もかも Frodo が選び、決めていかねばならない。しかし選択のために最低限必要な情報は準備されるのである。Gandalf はある面でいけば天使のような存在である。最小限度必要なときに現われて示唆を与えて姿を消す。Frodo はその情報から判断して、ホビットの村から去る決意をするが、その時期を決める事もすべて彼の自由意志に依らねばならない。その後の重要な時に仲間たちはそれぞれ判断して選ばねばならない状況になる。最善を期しても選択が極めて難しいことがしばしばである。しかし苦しいながらも自由意志による選択を通して、道は進められ、一人一人は次第に成長していく。

その上 Frodo には Gawain のような名誉心はまったくない。理想的な騎士でも何でもない、小さく無力な一人のホビットによる、利己主義と正反対の決断である。作品全体に一貫して流れるのはこの自由な選択と決断である。大任を帯びるには意外と思われる Frodo が選ばれて使命を与えられる。Sam も無学で無骨、素朴そのものであるが、Frodo が最も頼りにした伴侶である。このような例は歴史の中に枚挙に暇が無い。視点の転換、基準の逆転など、キリスト教の価値観によって動く登場人物たちがこの作品には躍如としている。

自由な選択はまた一貫して献身的犠牲を可能にしている。自己犠牲による救済というキリスト教的課題が本作品の核となっている。ここには人のため、仲間のため、村のため、Middle Earth 全体の救いのために生命の危険を冒してまでも協力しようとする Frodo とその仲間たちがいる。Frodo は Sam に ‘I tried to save the Shire, and it has been saved, but not for me. It must often be so, so that others may keep them’ (*The Return of the King*, p.273) と話しているが、このような無私の精神はホビットの村を救うためにすべてを放棄した Frodo とその Frodo に最後まで付き添った忠実な Sam に明らかに体现されている。Samこそはあらゆる艱難の中で主人を支え励まし、最高の自己放棄、愛の体现と言う事ができる。

こはまた身代わり、‘substitution’というキリスト教の概念につながる。キリストの脇腹の傷は贖罪のシンボルである。Frodo の傷は、人類を救うために身代わりとなって十字架の死を遂げたキリストの傷を連想させる。Ring の破壊という使命に目覚めた Frodo は死を覚悟でその遂行に当たらねばならなかったが、最終的にはいわば偶然とも言えるような方法で Ring は Crack of Doom で破壊された。それも Gollum によって。肝心の Frodo がそれを手放すことを拒んだときに、敵である Gollum が彼の代わりに働いたのである。これは身代わり、つまり一種の substitution であり、この概念はキリスト自身の贖

いの業を頂点として、教会の長い伝統の中に息づいてきている。Tolkien と同じく Inklings の仲間だった C. S. Lewis や Charles Williams は特にこの点に関心を抱き、関連思想を論じているし、創作にもしばしばこれをテーマとしている。<sup>(注16)</sup> 救い主キリストはユダの裏切りによって処刑されるが、ユダ自身は知らず知らずのうちに重大な役割を果たしたことになる。Frodo の使命遂行の完結も悪玉と思われた Gollum の介助によって実現したのである。

Gollum は不愉快な悪者で、Frodo に襲いかかって Ring を奪おうとつねに隙を狙っていた。Gollum を亡き者にする機会は数回あったといえる。それをなぜ放置しておいたのか。Gollum を徹底的に排除しない、この姿勢は LOTR がキリスト教的思想に打ちたてられているもう一つの証明になっている。これは、キリストがユダの背信を予知しながら彼をそのまま弟子の中にとどめて置いた事と同一線上にある。何故ユダを放置したのか。答えはマテオ福音書13章24節からの「毒麦のたとえ話」に語られている。LOTR ではごく始めの頃に Gollum の欺瞞について Gómdalf が語る。Frodo はこれを聞いて、なぜそのような Gollum をそのままにしておくのかと訪ねると Gandalf は深い思いに耽っていたが、いさめるように Frodo に答える。

“Gollum can be cured before he dies. My heart tells me that he has some part to play yet, for good or ill, before the end.” (*The Fellowship of the Ring*, p.65)

また Rivendell での会議においても、‘he may play a part yet that neither he nor Sauron have foreseen’ (同 p.246) と発言している。自分たちにとって邪魔になると思う者を速やかに排除するのは決して賢明とは言えないという見解を Gandalf は告げている。Frodo は使命を果たし終えたあとになって、このことに気づく。Gandalf は Gollum に対して改心の可能性があると考えて超人的な忍耐と寛容を示し、正当に殺すことも出来たし、又その機会は何度かあったにもかかわらず、彼に手をかけなかった。Sam に至っては Gollum に対して煮えくり返るような怒りを感じ続けていた。目的地に近い所で又もや Ring を狙う Gollum を見つけると、‘Now at last I can deal with you!’ (*Return of the King*, p.195) と言って今度こそは彼を殺そうとするが、この時でさえ Sam は不思議な憐れみに駆られて、上げた腕を下ろしてしまう。その直後に Gollum は Frodo を襲って Ring を指ごと奪い取り、興奮の余り、奈落のそこに Ring もろとも転落し、こうして Frodo の使命を代わって果たすことになったのである。これはローマ書8章28節で「神を愛する人、すなわち計画にしたがって神に召された人々のために益となるようにすべてが互いに働きあう事を私たちは知っている」とパウロが書いているところのものである。絶対に良いものだけを存在させようとする事が果たして本当に良いのか、これは哲学や倫

理学で論じられる問題であり、Tolkien によれば、悪とか不都合と思われるものを簡単に排除することはキリスト教的見方ではないのであって、これがキリストの考えである。そしてこれが ‘inversion of the norm’ である。前述したように、‘基準の逆転’ はキリストの考えに頻繁に見られるものである。

Tolkien がカトリック的な視野を持って組み立てたこの物語の中で見逃せないのは SGGK と LOTR それぞれの使命達成の日付けである。それにはすぐには気づかないが、Tolkien の意図は明らかである。Gawain は Green Knight との約束どおり、毎年1月1日に Green Chapel にやってきた。Beheading によって死ぬはずだった者が新たに生き始めた日、それも一段と深い自己認識に基づく生き方が始まった日であった。Gawain の使命達成は狭い意味では彼一人の業績であるが、彼は Round Table の騎士全員を代表して探索と冒険の旅をしてきた行ってきたのであるから、広くは Round Table の騎士全員にとっての名誉であり、彼等の生き方に新たな息吹を吹き込むことになった。

Frodo が使命を達成した3月25日であったが、この日付には作者の特別な思いが込められている。Gandalf は Frodo に告げる。

‘... in Gondor the New Year will always now begin upon the twenty-fifth of March when Sauron fell and when you were brought out of the fire to the King.

(*The Return of the King*, p.203.)

カトリック教会でこの日は「神のお告げ」の祝日、処女マリアがキリストの母となることを承諾した記念の日である。つまり人類にとって新しい年がここから始まったと言える。3月25日を選ぶ事によって Tolkien は Frodo の業績に対する評価を示唆しているのである。Shire の救いはこれによって始まったと考えられる。又ここで聖母マリアに対する特別の思いを抱く作者の評価が密かに込められている。John Murray 師の LOTR 批評の手紙に対して Tolkien は自分が聖母マリアについて特にその “majesty and simplicity” が生み出す美を Galadriel の中に描いたと答えている。<sup>(注17)</sup> また Rivendell で会議の末、Frodo が Ring を破壊する使命を引き受けようと言うときの彼の心境は、天使ガブリエルが神からのメッセージを伝えてマリアの返答を求めた時のマリアの心境とまったく同じであると思われる。‘I will take the Ring though I do not know the way’ (*The Fellowship of the Ring*, p.258)。

すでに述べた Naomi の見解にもかかわらず、キリスト教について多少とも知る読者であれば、牽強付会することなく、LOTR をそのまま読んでも、それがキリスト教的な価値観に基づく作品であり、しばしば聖書の人物や事項を想起させることに気づくであろう

う。終始一貫して読者は、常識的な富、力、成功、幸福などの概念の再検討を迫られる。Tolkien は信念をファンタジーの世界を背景にすることによって、一層自由に物語を展開させている。これにより LOTR はそれまでの創作よりも更に示唆に富んだ作品となった。強者の勝利、権力、名声、勇敢な主人公の冒険の外面的成功などに対して、弱者の存在意義、価値の多様性、外面的成功の相対性などに関するキリスト教的世界観を反映させながら、LOTR において作者は価値基準の逆転を説得力をもって表現していると結論できよう。

#### 注

- 1 J. R. R Tolkien, *The Lord of the Rings* 1. *The Fellowship of the Ring*, 2. *The Two Towers*, 3. *The Return of the King*, (Unwin Paperbacks, 1977) を使用する。
- 2 Jessica Yates , *Unfinished Tales of Numenor and Middle-Earth* の書評 (British Book News, Jan. 1981), p.57
- 3 *Ser Gawain and the Green Knight*, J. J. R. Tolkien, E. V. Gordon 編, Second Edition, Norman Davis (Oxford Clarendon Press), 1970. David Harvey, *The Second of Middle-Earth* (George Allen & Unwin, 1985), p.92
- 4 Seamus Heaney, *Beowulf. A New Translation* (FaberanFaber, 1999), p.xi Verlyn Fieger, Introduction' in *A Question of Time: J.R.R. Tolkien's Road to Faerie* (Kent State University 1997), p.1.
- 5 Seamus Heaney, loc. cit.
- 6 Jane Chance, *The Lord of the Rings: The Mythology of Power* (, Twayne Publishers), p.16. および Roger Sale, "Tolkien and Frodo Baggins " in *J. R .R. Tolkien*, Harold Bloom 編 (Chelsea House Publishers), p.28.
- 7 'Gawan watz glad to begynne those gommez in halle' SGGK, 495行。
- 8 SGGK の1874-1875 行を参照。
- 9 Jane Chance, op.cit. p.16.
- 10 David Harvey, *The Song of Middle Earth* (George Allen & Unwin, 1985) p.79.
- 11 Jane, p.16.
- 12 Tolkien, *The Letters of J.R.R. Tolkien* (George Alle & Unwin, 1981) p.326, no.246.
- 13 Ibid. p.238, no.246.
- 14 Naomi, "Myth in the Making" in *The Observer* (August 23, 1981), p.23
- 15 Tolkien, *Letters*, op.cit. p.172, no.142.
- 16 Alice Mary Hadfield, 'Coinherence, Substitution and Exchange in Charles Williams' Poetry and Poetry-Making' in *Imagination and the Spirit*, ed Charles Huttar (Eerdmans Publishing Company, 1971), pp. 229-258.
- 17 Tolkien, *Letters*, p.172, no.142.